

## 報告梗概

「後期ビザンツに於ける地方「行政」の状況——「ケファリ」(kephali)と「アフセンディス」(authentis)の比較から」

平野智洋 (女子美術大学)

地方分権化・遠心化の傾向とそれに対する中央政府による統制力強化の試みは、長いビザンツ史を通じて幾度か観察される営為である。後期ビザンツ帝国に於いては帝国領土の縮小・寸断と国家としての弱体化の前に遠心化傾向はかつてなく明確なものとなった。帝国地方領土の統治は曲がりなりにも「行政機構」に立脚していたとされるのであるが、こうした時代背景の下で制度は果たしてどの程度実効性のあるものであったであろうか。

本報告では後期ビザンツ時代に於いて一般に行政官と目される「ケファリ」(kephali)について、14世紀成立の『訓令書』を基本としつつ、いくつかの公文書史料、及び15世紀の史書、ゲオルギオス・スフランツィス(Georgios Sphrantzis)『小年代記』、作者不明の『トッコ家年代記』などからその職務・権限の実態について補完的に抽出していく。特に、15世紀の帝国辺境領ペロポネソス半島(モレアス専制公領)に於いては政府主導の対ラテン再征服活動が成功裏に進行しつつあったが、その中でケファリが果たした役割が注目される。史書に描写されるケファリの活動を検証し、従前の研究ではあまり大きく評価される事なかったケファリの軍事的な職務を再考察する事で、ケファリの役職上の位置づけについて、またその制度としての実効性について、評価の修正を試みる。更に「公僕(皇帝の僕)」としてのケファリの側面について、地方に於いて実質的に自治ないし独立的権力を獲得した人物と描写される「アフセンディス(アフエンディス)」(authentis-aphentis)を取り上げて比較し、彼らとケファリの持つ権力の相違を検証する事で後期ビザンツという混乱した時代に於ける「行政」「統治」「権力」のあり方についての一考察としたい。